

# しあわせ 小箱

居酒屋ノート \* 1

道したラーメン屋さんとか、何でもいいんですよ」。何を書こうか、悩んでいる客にはそう声をかける。気難しい顔を

校歌とわかつた。使命を果たすため、みんな一緒に頑張ろう――。

いで、客が自由に思し出を書き込むのだ。

東京にある九州の郷土料理店「新橋 有薫酒蔵」はいつもサラリーマンたちでにぎわっている。店内には「居酒屋ノート」なるものがある。出身高校別に壁にずらりと並んでいて、客が自由に思い出を書き込むのだ。

## 無邪気につづる「あの頃」

して、いた客は「そうだ、食堂の焼きそば・パンがうまかったんだ」などと思ひ出し、無邪気に書き込んでいく。

## しあわせ 小箱

居酒屋ノート \* 2

「この人が  
あなたのお父

父の行きつけ、銀  
薫酒蔵」だった。

画家、青木繁の息子だ。番組が終わつた後、祖母の言葉にはどれだけ驚いたことか。

た出来事があつた。中間試験の勉強をしていると祖母が神妙な面持ちで30分だけテレビを見なさいと言う。テレビに出ていたのは「笛吹童子」を作曲したとして当時話題だった音楽家の福田蘭童氏だ。この音楽家はどうやら、日本を代表する

山口県岩国市の母の実家で育てられた。中2の時、人生で最もびっくりした出来事があった。

テレビ見せてこの人がお父さん

歴  
た  
た  
た

父は妻がありながら

忘れもしない。

つまり、私の父方の祖父は青木繁ということ？  
高校卒業間近の1963年2月21日、東京へ就職試験に行って、池袋で

居酒屋ノートで知られる「新橋 有薫酒蔵」のおかみ松永洋子さん(67)は高校卒業間近の1963年2月21日、有薫酒蔵のカウンターに、初めて会ったばかりの父と並んで座った。

就職試験に合わせて山口県岩国市から一時的に上京していた。店ではたくさんお料理を出されたけれど、当時18歳だった洋子さんが最も覚えているのは焦げた卵焼きだ。食べ物は残しちゃいけないって言っていたけれど、どうしても食べきれなかつた。

もうすぐ東京に引っ越すという頃、一緒に暮らしていきた祖父母宅に電話がかかってたけんね

## 出会いは焦げた卵焼き

しかし、焦げた卵焼きを焼いてくれた人？ 協和さんは、洋子さんに一目ぼれし、とても緊張しながら卵焼きを焼いて焦がしてしまったのだ。

石油会社の受付係になり、東京暮らしを始めてからは、昼休み1時間だけのランチデートを繰り返した。3年間交際して晴れてゴールイン。協和さんによると、プロポーズの言葉は特にない。今、洋子さんに向かって言う。「あんたうちに来てくれるもんと思つてたけんね」

京都旅行に行くけん、京都で会えんやろか」と、福岡弁でデートに誘われた。洋子さんはたまげた。板前さんって、もしかして焦げた卵焼きを焼いてくれた人？ 協和さんは、洋子さんに一目ぼれし、とても緊張しながら卵焼きを焼いて焦がしてしまったのだ。

あれ？ 右手が思うように動かないな……。居酒屋ノートで知られる「新橋 有薫酒蔵」のおかみ松永洋子さん(67)は2004年4月、右半身が急に動かなくなり自宅で倒れた。協和さん(72)は動搖するばかり。一緒にいた知人が救急車を呼んだ。

脳内出血を起こし、脳内出血を起こし、危険な状態だった。「話せないようになるかもしれないよ」と、車いすの生活も覚悟して下さった。洋子さんは医師の言葉に頭が真っ白になつた。ところが、3週間ほどして突然、声が出るようになつた。リハビリも続け、自分で歩けるまで回復。医師は目を丸くした。

## しあわせ小箱

### 居酒屋ノート \* 3

もうすぐ東京に引っ越すという頃、一緒に暮らしていきた祖父母宅に電話がかかってたけんね

ほどして突然、洋子さんが店を離れたようになつた。リハビリも続け、自分で歩けるまで回復。医師

## どうせ死ぬなら働きながら

8か月間、ノートは3校分しか増えなかつた。洋子さんは少し誇らしげにつぶやく。やっぱりもう少し頑張らなくちゃ、とうことかしら。

洋子さんが店を離れたようになつた。リハビリも続け、自分で歩けるまで回復。医師

## しあわせ 小箱

居酒屋ノート \* 5

店の客に被  
災地へのメッ  
セージをお願  
いしたいとい  
うわけだ。

数人の大学生らが訪れ、  
おかみの松永洋子さん  
(67)に言った。「ノー  
トを使って東日本大震  
災の被災者を勇気づけ  
たい」。聞けば、被災  
地と東京の人たちが  
「文通」するプロジェ  
クトを計画 中とい  
う。店の客に被  
災地へのメッ  
セージをお願  
いしたいとい  
うわけだ。

### 被災地と東京の懸け橋に

福島市の女性はノー  
トを使って東日本大震  
災の被災者を勇気づけ  
たい」と書いた。

福島市の女性はノー  
トに、震災で感じたこ  
とはメールや電話では  
なく、直接のつながり  
で共有していかなくて  
はいけない」と書いた。  
居酒屋ノートは卒業生  
同士のつながりだけで  
なく、被災地と東京の人  
々の懸け橋にもなりつつ  
ある。



さてきなアイデアだと  
思ったけれど、おかみは  
すぐにうんとは言えなか  
った。学生たちはいざれ  
卒業する。一時的な支援  
は先方にも迷惑だろう。  
ところが学生たちは何度も  
店を訪れ、その熱意に  
負けてついに承諾した。  
今年9月には計画に協力  
する仙台市の温泉を学生  
らが訪れ、さらなる支援  
計画を話し合う予定  
で、松永さんも招待さ  
れている。

文・山田佳代

(了)